

1. S…V関係
2. 目的格補語
3. That節
4. What節
5. 倒置
6. 同格
7. It…that…
8. 意味上の主語
9. 関係詞
10. 比較構文
11. 共通関係
12. 挿入

【勉強の仕方】

参考書や問題集には、「対象とする読者のレベル」「達成しようとする目的」「使用方法」というものがある。多くの有名参考書に、「いいね!」と同じか、それよりも強力な「ダメ!」が付くのは、実は、この3つのポイントが分からずに、「有名だからご利益があるのだろう」と思って飛びつく読者が後を絶たないからである。

このテキストが「対象とする読者」は、私が想定するところの「中学英語の基礎」を習得している者である。「達成しようとする目的」は、2つある。第1は、私の既に与えた、第1課から第4課までの「逐次決定」の読解技術を<知っている>人々が、それを「使うための演習を行う」ということである。第2は、伊藤和夫著「英文解釈教室」(研究社)を独力で演習できるようにすることである。「使用方法」は、①まず、例文を「例文の訳や意味を気にせずに、その回のポイントとする構文上の現象の諸相を眺める」という目的で見る(動画の中で実際にやって見せるので観察するように)、②次に、語義やポイントを見る。分からない単語などを辞書で調べるような手間は、ここの時点ではかけてはいけない(動画の中で、以下同文)。③例題をざっと、分からないところはそのままにして最後まで読む(5分程度)。何がテーマかをつかむ。④【テーマ】を見て、テーマを確認する。⑤動画の構文についての解説、どのようにして読んでゆくかについての解説をよく見る(但し、第0回のガイダンスを受けていない諸君には、本当の意味での同時決定から上級の読解はできるようにはならない)。⑥疑問点を辞書で調べ、文法書で確認する。⑦全文を和訳する

【『英文解釈教室（研究社）』について】

『英文解釈教室（研究社）』の本来の目的。参考書には、大別して、「何かを知る」という目的と、「知っていることを定着させる」ということとの2つの分野がある。『英文解釈教室（研究社）』は、入試の下線部訳の問題を集めて、それを構文上の論点に応じて分類を行い、解説を加えたものである。その基本的なアウトラインは、例えば、whichがあった時に、それは疑問代名詞なのか、関係代名詞なのか、thatがあった時に、それは、同格名詞節のthatなのか、関係代名詞のthatなのか、という「判別」についての解説が展開されている内容になっている。この本に賛否があるのは、「構文」というものを知りもしなかった学生には、「勉強になった」ということになる一方で、構文分析ができないにせよ、「構文」というものを知っていた学生からは、「構文を分類陳列して、訳の分からない説明を加えている」という感想を持たれることになるからである。

それは、『英文解釈教室（研究社）』が、その成り立ちからして、構文判別のためのエチュードとして書かれていることから来ている。この本は、英語の読み方を説明する本ではなくのである。英語の読み方が分かっている読者が、その読み方を運用演習するための＜演習書（エチュード）＞なのである。具体的にどうということかという、例えば、『英文解釈教室（研究社）』においては、「強調構文」は、その判別のためにはit…that…と書かれている文を見て、「it be …that…」を消去してみて完全文が残れば、それは強調構文である、という「判別」を述べるようなところに明らかになっている。

英語が読める、少なくとも、ライトモチーフ読解を習得した者は、it isまでを見たら、「これは強調構文であるな」と分かる。それは、その強調構文を書いた人間の思考と同じである。書いている人間は、完全文を書いてから、強調の焦点を考え、それをIt is …… that という枠構造に分裂させて収納させるという手順で、その文を書いたのではない。当たり前のことであるが、左から右へと書いていただけである。その書き手の思考を正確に追求できれば、強調構文は見た瞬間に分かる。こういう読み方を教わった上で（私の講義では「強調構文の読み方」などというテーマは存在しない。強調構文は、文法的には、どのような構造であるのかが、定かではない書き方の1つであるので、文法的に分析のしようもない。しかし、ある基本原理さえ守っていれば、出会った瞬間にそれと知れるのであるから、特段のトピックとして時間枠を使う必要がない）、それをちゃんとできるようにしてゆけば良いだけである。

強調構文だけに限って言えば、そもそも解釈教室の編集の仕方そのものが、強調構文を判別できないように編集されているのであるから、ある程度、英語ができる学生からは、そういう点が、大変にストレスがあるのだろう。紙面が限られるので仕方がないのであろうけれど、強調構文であると判別ができないように編集しておいて、「ほら、判別できないだろう。だけど、こうやって、イギリス人などが絶対にやらない受験的方法論でやると、こんなふうに分かるの、ウン」という調子になってしまっている。『英文解釈教室（研究社）』は、こういうエチュードとして書かれた本であるが、その後、著者である伊藤和夫先生が、教育の主眼を「直読直解」に置こうとして（それは結局、先生が意味決定の技術を持っていなかったためにうまく行かなかったのであるが）、あたかも、『英文解釈教室（研究社）』が解釈力、読み方を向上させる（「何かを知るための」）本であるという誤解を招いたことが、この本にとっては不幸だったのである。

しかし、それは『英文解釈教室（研究社）』自体の罪ではない。この本は何のための本であり、自分はそこに何を求めるレベルであるのかが分かっていたら有効に使えるよくできた演習書である。この演習書に着手するためには、英語の読み方が分かっている必要がある。そこで、既に、私の講義のフルコースを受けていることを前提にしつつ、この本の取り組み方を示してみたい。ここに掲げている演習は、いずれも『英文解釈教室（研究社）』から抜粋したり、引用したりはしていない。『英文解釈教室（研究社）』のエッセンスをかいつまんで見せること、その取り組み方を示すこと、いままで教えた読み方を貫徹すれば、自然に英語は読めることを示して、「なるほど、あとは練習だな」という学生に向けて、『英文解釈教室（研究社）』をやる準備をさせるためのものだ。私の教室では『英文解釈教室（研究社）』は高校1年向けの書籍である。ここでの12回の講義を見た後に、あるいは見ながら、『英文解釈教室（研究社）』に自力で取り組むことを強く勧める。

第1回 S…V関係

(1)

例文

1. The great source of all light and heat is the sun.
2. The dog, seeing the stranger, began to bark.
3. A man named Wilhelm was staying at an inn.
4. His father, moved by the beauty of the scene, removed his hat and bowed his head.
5. The professor who teaches your class is my friend.
6. Language, although it is so common, is a very wonderful thing.
7. The people who would do me honor if I were a minister, would be the first to throw a stone at me in adversity.
8. Actions that matter to no one without a motor-car, with a car, may become anti-social and deadly dangerous.

語彙やポイント

notion 名) ラテン語 *notio* (考え) **note** 記す (動)

over 副) 《主に米国で用いられる》(ある期間中[まで])ずっと. **stay a week over** 1週間ずっと滞在する.

influence 動) に影響する **in** (中へ) **flu**(flow: 流れ)

「星からの力が流れ込んで運命を変える」(伝染病などは、星の影響と考えられていたから)

Franco-Prussian 普仏戦争 1870年から始まるプロイセン中心のドイツ統一のための戦争

occur 動) …が生じる

simultaneous 形) 同時に

fought< fight 動) 戦う

beyond… 前) …を超えて

within (範囲) . . . **of** (起点) . . . ,

it is true, . . . ,but 確かに…、だが…(譲歩)

otherwise 副) その他の場合では **other** (他の) **wise**(way)

the rule . . . that the rule と**that**は同格。

S hold good Sは有効である。**This agreement holds good for a year.** この契約は1年間有効です。

get people to— **SVOC**

what . . . like **Fly me to the moon and let me play among stars,**

Let me see what spring is like on Jupiter and Mars

enough to 形容詞+**enough to**不定詞 …するためには、十分に形容詞である

例題

One notion left over from the nineteenth century and still influencing our thoughts is that two major wars cannot happen within a few years of one another. The American civil war and the Franco-Prussian war, it is true, occurred almost simultaneously, but they were fought in different continents and by different people. Otherwise the rule seemed to hold good that you can only get people to fight when everyone who remembers what the last war was like is beyond military age. Even the gap between two world wars—twenty-one years—was large enough to ensure that very few men took part in both of them as common soldiers.

【テーマ】 大きい戦争が一定の間隔を空けることについて。

【和訳】 19世紀からずっとここされており、そして今でも我々の思想に影響している考えは、2つの大きい戦争がお互いに数年以内には起こり得ないということである。独立戦争と普仏戦争は、確かに、殆ど同時に起こったが、しかし、それらは異なる大陸で異なる人々によって戦われたのであった。その他の場合には、最近の戦争がどのようなものであるかを覚えている全ての人が軍役年齢を過ぎている時に限って、あなたは人々を戦わせることができるというルールは、有効なままであるように見える。2つの大戦の間の間隔——21年間——でさえもが、一般兵卒としては、それらの両方に参加している男性は本当に殆どいないということを確かなものとするに十分なほど大きいのである。

例文

1. The most beautiful thing we can experience is the mysterious.
2. Art, science and religion are the three main fields of man's creative

語彙やポイント

The Englishman's lack < The Englishman lacks 名詞化表現 意味上の S + 意味上の V

indifference 無関心 < in (not) + different < dis (away, separate) + ferre (bring) 「別に運ばない」 > 区別を感じない > 関心がない

establish e(en動詞の語頭)+sta(stand)+bli(able) しっかり立つことができている

long established

convention that 同格名詞節

keep to …に固執する keep + (to X) to (固着) to x xに固着した状態で

neither A nor B (618) AでもBでもない

interfered with … entre(間に)+ferir (打つ) [古仏] 「間に打ち込む」 > 「妨げる」

appear to S appear (to be) 形容詞 SVC Sは形容詞に見える

all ……is to (15) all that he wants の目的格の省略 (口語ではよくある)

例題

The Englishman's lack of curiosity about others, his complete indifference to what others—even when they are his own people—think of him, his long established social convention that everyone should keep to his place and neither interfere with anyone else nor be interfered with, will often make him appear to be unfriendly, when all he wants is to be left alone.

【テーマ】英国人の愛想のなさについて。

【和訳】英国人の他人についての関心の欠如、他人が、それらの他人が自分の身近な人々である時でさえ、自分について何を考えているかについての彼の完全な無関心、誰もが自分の場所を大切にすべきであり、他のいかなる人も妨げず、また妨げられざるべきであると言う社交上の彼の長く確立された習慣は、彼が望んでいることの全てが、一人にしておかれることである時には、しばしば彼を非友好的に見せる。

注意：和訳というのは、原文の構造が極力保存されている必要があるので、「他にも足さない、何も引かない、ありのままである」ことが重要である。

例文

1. To recognize that your merit is not so great as you have thought may be painful for a moment.
2. To know the language of a people is to know that people. (14)
3. Thinking that you know when in fact you don't is a fatal mistake.

語彙とポイント

altruistic < altruist—a person who is habitually good to others

ali, alt, alter, althus, (other) 他の > 「利他主義、博愛主義」 ⇔ egoism [ego: 自分の] 利己主義

S is **not** . C **either** もまた …でない。

[What is .](S) . . is (V)

The man(S) . . . is (V)

S **prefer** A **to** B Sは、Aを好む、Bに対して(to:対比) ➡ 「SはBよりAを好む」

who . . . himself

whether or not

Whether or not he finds a job in New York, he's moving there.

ニューヨークで仕事を見つけようと、そうでなかりと、彼はそこへ引っ越していく。

例題

To eat when one is hungry is certainly not altruistic; but it is not selfish either. What is selfish is to eat the last biscuit when others are hungry too. The man who prefers to give the last biscuit to his neighbour to eating it himself, whether or not he is morally better than the man who does it because he thinks it his duty, is certainly not a selfish man.

【テーマ】利己主義とはどのようなことをいうのか。

【和訳】誰かが空腹の時に食べることは、成程利他的ではないが、しかしそれは利己的でもまたない。利己的であるということは、他人がまた餓えている時に最後のビスケットを食べることである。最後のビスケットを自分の隣人にあげることを、それを自分自身で食べることも好む人は、その人がそうすることを自分の事務と考えるから、そうするという人よりも倫理的に良からうが、そうではなかりうが、確かに利己的な人ではないのである。

注意：第1課から第4課までのライトモチーフ読解を勉強してくれた諸君は、自分が全文の中のどこにいるか、という感覚について、意識をしてもらいたい、一階にいるのか、地下一階なのか、地下一階で、同じ部屋か、隣の部屋に入ったかなどである。